

なぜ神は言葉を混乱させたか

奨励	シュベネマン・クラウス〔しゅべねまん・くらうす〕
奨励者紹介	同志社大学名誉教授

世界中は同じ言葉を使って、同じように話していた。東の方から移動してきた人々は、シンの地に平野を見つけ、そこに住み着いた。彼らは、「れんがを作り、それをよく焼こう」と話し合った。石の代わりにれんがを、しっくい代わりにアスファルトを用いた。彼らは、「さあ、天まで届く塔のある町を建て、有名になろう。そして、全地に散らされることのないようにしましょう」と言った。主は降って来て、人の子らが建てた、塔のあるこの町を見て、言われた。「彼らは一つの民で、皆一つの言葉を話しているから、このようなことを始めたのだ。これでは、彼らが何を企てても、妨げることはできない。我々は降って行って、直ちに彼らの言葉を混乱させ、互いの言葉が聞き分けられぬようにしてしまおう。」主は彼らをそこから全地に散らされたので、彼らはこの町の建設をやめた。こういうわけで、この町の名はバベルと呼ばれた。主がそこで全地の言葉を混乱（ババル）させ、また、主がそこから彼らを全地に散らされたからである。

（創世記 11章1―9節）

「日本に来てから」

私は、1970年、ドイツから日本にまいりました。同志社大学文学部で哲学と倫理学を教えておりましたが、最初は京都にあります日本クリスチャン・アカデミー関西セミナーハウス、キリスト教関係の社会教育の場所ですが、そこへ呼ばれてきたわけです。当時私は、日本語が全然できませんでした。本当に困りました。現在は京都も国際的になり、たとえば、道の名前の標識も、四条通りという漢字の下に英語でも書かれています。バスも、銀閣寺行きでしたら、漢字の下に英語も表記されています。当時はそういうことがなくて、全部、漢字でした。バスに乗ることもできませんでした。安全な交通手段は、当時はまだ走っていた市電でした。市電はゆっくり決まったコースを走って、途中で降りることもできたわけです。タクシーで移動するときは、日本人の家の人がメモを書いて「この人をそこへ連れて行ってください」と運転手に伝え、出かけていたのです。困ったのは、一度歩いた道をなかなか覚えることができなかったことです。大きなところ、京都の四条や河原町などは覚えやすい。ところが、横道に入りますと、家は全部同じように見えるのです。人間は家をそのまま覚えているのではなく、あれはタバコ屋さん、あれは酒屋さんとか、記憶して覚えます。漢字が読めなかったときは、どういう店であるかを覚えることができずに、何回も同じ道を通り、来たところがある場所だなという感覚はありませんでした。本当に困り果てました。人と話すことができず、自由に出かけることもできず、道を覚えることもできません。

「バベルの塔」と私

そのときに、有名な「バベルの塔」の話思い出しました。人間は何でもできると思い、傲慢になって、天に届く塔をつくらうとしたのです。神が怒って、それを許さなかった。だから人の言葉を混乱させて、もともと同じ言葉を使っていた人間が、お互いに理解できなくなってしまう、協力しあって、一緒に町と塔を建築できなくなった。私も、そういう人間ではないかと思いました。ドイツで生まれ、ドイツで教育を受け、何でもできるだろうと思って、日本でも私の言葉と考え方は通じるだろうと思っていた。しかし、そうではなかった。神に罰を与えられて、何もできないよと限界を見せられたのです。落ちこんで、時々、ドイツに帰った方がよいのではないかと、考えました。帰ることもできなかったので仕方なく日本語の勉強を始めました。これは本当に苦しいことでした。それまで英語とフランス語のほかに、大学で神学を専攻していたので、ラテン語、ギリシャ語、ヘブライ語も全部学びました。日本語は、それらの言語とはものすごく違うのです。大きな違いは、ほかの言語は、アルファベットを分解して組み立てると言葉を覚えることができますが、日本語ではそれができません。

「日本語の特色」

だんだんわかってきたことは、第一に日本語、特に漢字は頭だけでは覚えることができないということです。体を使い、練習しなければならない。お世話になった先生は、私に小学校一年生のように何回も何回も宿題を出して、同じ漢字を書かせました。私は小学生じゃない。でも、先生は「書きなさい、書きなさい、そうしないと覚えることができないよ」と言いました。当時、書かされた漢字は、今でも書くことができます。その後、目で覚えた漢字は、読むことはできますが、書くことはできません。第二の点は、日本語は、言葉の表現方法の種類が多いということです。文法は案外単純です。ドイツ語では、美しい文章をつくるために、どうしても複雑な文法を使わなければなりません。日本語は美しい言葉が多い。面白いと思いました。たとえば英語ではI、ドイツ語ではIchという場合、日本語では、私・僕・俺・こちら・小生など、いろいろな言葉で表現することがあります。英語でのYouは、ドイツ語ではDu、敬語としてSieを使います。日本語は、あなた・君・お前・そちら・お宅さんなど、たくさんある。面白い言葉やどういう言葉を使うかなどは、やはり教科書ではなかなか学ぶことはできません。そのとき、初めてわかったのは、外国語を学ぶために、その国に行って、その国の人たちと一緒にしばらく生活して、その人たちがどういう生活をしているか、どういう人間関係があるかを体験しながら外国語を勉強することです。第三に、こんなに国際的になっても日本の外国語教育は相変わらず教科書を教えることです。アメリカ人の友だちから聞いた話ですが、ロサンゼルス空港で飛行機から降りたばかりの年配の日本人が、真っ青な顔をして汗をかいて、具合が悪そうだったので、英語で“Are you sick?”と声をかけましたが、反応が全然ない。そこで“Shall I call you a doctor?”お医者さん呼びましょうかと言いましたが、それも通じなかった。いくつか質問をしても全然、反応がない。最後に“How are you?”と聞きました。答えはわかりますね、“Thank you. I am fine.”教科書の答えしか返ってこなかったそうです。

第四に、日本語のニュアンスについてです。私は、日本語を学びながら日本語を通して、私自身の母国語であるドイツ語、または自分の考え方が初めてわかり、少しずつ見直すようになりました。日本語はかなり曖昧な言葉です。たとえば、京都では「結構です」と言います。結構ですとは、どういう意味でしょうか。イエスという意味もあるし、ノーという意味もある。文脈（コンテキスト）によって、イエスであるか、ノーであるかを判断する。また、「すみません」という言葉がありますが、これもずいぶん曖昧な使い方で、感謝を表すために、謝るために「すみません」という言葉を使うことができます。家に大学の先生から電話がかかってくると、家内が電話をとって、まず、「主人がいつもお世話になっております」と言います。全然、世話になっていなくても、その先生が嫌いだとしても、一応、言うわけです。「お世話になっております」は、ドイツ語でも英語でも訳せません。ドイツ語に訳すと「うちの主人はバカです、自分の力で何もできない」という意味になってしまう。これは面白いなと思いました。言葉は、コミュニケーションのために必要ですが、言葉で表すことができないこともあるということ、そのとき初めて感じました。

第五に、日本語には本音と建前の違いがあります。頼まれて講演をしたときも、PTAとか婦人会とか、地域によって、反応が全然違います。京都の人はアホなことをいっても「先生、よいことを教えていただいた、ありがとうございます」と言います。実は、そう思っていないのです。大阪と東京の人は全然違う。大阪の人は、「先生、これはよかった、わかりやすくして勉強になった。この点はちょっとわかりにくかった、このことは言わない方がいいですよ」と、はっきりドイツ人みたいな物事を言います。だから京都で、講演するのは気持ちよかった。大阪や東京から講演の依頼があったときは、よく断りました（冗談です）。「日本人は本当のことを言わないのですね」とよく言われます。しかし、そうではない。本音と建前の違いは他者の立場に立って、その人の気持ちを配慮して、傷つけないという日本人の言葉としてあるわけです。

私が聞いた話です。ある有名な東京に本社がある会社の京都支店長は、名古屋出身の人でした。ある日、取引先の会社の社長に「うちに遊びにきてください」と言われました。2回目に言われたときに、お土産を買って、その人の家を訪ねました。しかし、大変な問題になり、仕事上の関係も難しくなりました。名古屋出身の支店長には、京都の常識がわからなかったのです。同じことを10回くらい言われたときに、「そろそろ伺おうかな」と考えるべきでした。京都では、よその人に「一度うちにきてください」と言うのは、本当に来てほしいということではなく、「お前もうちの仲間にするよ」という意味合いなのだということです。京都の人ならわかったと思います。同じ考え方をもち、言葉の意味が分かりあえば、このような本音と建前も分かりあうことができる。そうすれば、京都の人に「うちへ来てください」と言われたら、そういうことではない、とわかります。私が京都で「先生の話、おもしろかった、よかった」と言われると、実は、そうではないことを私自身がわかっているし、私を褒めてくれる人もわかっているの、意味合いが通じます。他県出身である名古屋の人は京都の常識がわからないので、本音と建前の話が、うまくいかないのです。

「現代社会の特徴は」

現代の社会の一つの特徴として、同じ日本の中でも言葉の意味が通じなくなってしまうことがあります。世代間の考え方も、あまりにも違うので、意思の疎通がとても難しくなりました。普通の家庭を見ますと、夫婦同士、親子の間、ほとんど話し合いがありません。昔は家が親の職場であって、子どもの学校はそれほど家から離れていなかったの、皆、同じ世界で生活していて、同じ考え方をもち、相手が何を考えているかは大体想像できたのです。現在では、朝、父親が職場へ出かけていく。母親は、家に残っていて、夫が、どういう仕事をしているのか、わからない。子どもは学校で、父母の生活環境とはずいぶん異なった場所で過ごします。典型的な例として、中学生になって子どもが体のことを意識するようになって、父母は、しっかりした性教育を受けておらず、あまりわからなかったの、うちの子どもも、まだ何もわかってないだろうと思っています。自分の小さいころの経験をもとにして、子どもを見ているわけです。しかし、中学生の子どもは、父母よりも性に詳しいということは事実です。昔は親と子どもの世界、男性と女性の世界はばらばらではなく、村のような共通の世界で、皆、同じ考え方をもち、言葉がそれほど必要ではありませんでした。しかし今の時代は、考え方がばらばらになった。それなのに、大体、顔とくしの「うん、うん」というような、半分動物的な音だけが家の中でのコミュニケーションであるなら、日本の社会は弱いなあと思います。

新幹線に乗りますと、京都から東京まで約2時間15分です。隣のひとと一切、言葉を交わさない。日本は名刺の社会です。その人がどういう学校、どういう組織に属しているかという

ことがわかっていないと、その組織と関係ない、だからその人が私にとって存在しない、声をかけなくてもよいということです。私がドイツに帰って、フランクフルトで飛行機から降りて3時間電車に乗って実家に帰りますと、同じ車両に乗っている人は、「どちらから来られたのですか」とか、「日本はどういう国ですか」と声をかけてきますので、10分から15分くらい話をします。私に声をかける人は、私が、どこに勤めているか、何を教えているかは知りたくない。一人の人間として、私の意見を聞きたいのです。日本の社会はなかなかそれができない。私は、外国人です。電車に乗りますと混んでいても、隣の席は最後まで空いています。私の顔を見て、遠慮して、別の席を探し、場合によっては立ち去ります。しかし、「私は日本で41年暮らしているのですよ。犯罪を起こしたこともないし、税金もちゃんと払っていますよ」と思わず言いたくなります。

ずいぶん勉強になった経験をしたことがあります。梅雨明けの前に3階建てのホームセンターの園芸店で、苔の箱を見つけて買いました。店に預けて帰るときに持って帰る予定でした。途中いろいろな植物を見ていたら、後ろから中年の男の人が、ついてきます。3階の棚で釘を探していると、その人が近づいてきて、声をかけて「日本語ができますか」と聞いてきました。「はい、できます」と答えると、こう言われました。「今、下で苔を買ったでしょう。店の人に騙されていますよ。今の時期、絶対苔を植えることができませんよ。夏の手前ですから、今、苔を植えると枯れてしまいますよ」と。私はそのとき「ありがとう。わかった、でも、迷惑をかけないでください」とその人に大変失礼なことを言いました。そして、忠告されたにもかかわらず、苔を買ってしまいました。その人を探して謝りたい気持ちでした。彼はとても偉い日本人だと思います。見ず知らずの外国人である私に対して、日本語ができるかどうか心配し、しかも、どうしても助けるべきだと思って、声をかけ、注意してくれました。それを私は、無視しました。「悪かったな」と思いました。その人が、私に大事なことを教えてくれたのです。言葉の一番大事な役割、人と人との間の壁を破って、人を助けるということ。

「バベルの塔」の教え

41年たってから「バベルの塔」の話を読みますと、以前は、神は人間の言葉を混乱させることで、人間に罰を与えたと思っていました。しかし今は、それによって神が人間に新しい生き方の、新しい道を開いたと思います。一つには、言葉が違うから、人間は自分自身を見直す。自分自身の言葉、考え方、文化などを見直すことができます。いろいろなことを自分について学ぶことができる。二つめに、言葉が違うから、人間はお互いに助け合うことができるだけではなく、お互いに助け合わなければならないと思います。言葉の違う世界は非常に豊かな世界で、そこで我々が生活して、一緒に学びあい、一緒に協力することができて、そこで初めて成長することができるのです。

「スコラ哲学」の教え

ギリシャの世界にスコラ哲学という宗教的な思想がありました。スコラ哲学では、こう考えます。人間は同心円で生きている。一番狭い円は自分が生まれた家です。次の円は近所、次の円は自分の町、次の円は自分の国、一番広い円は世界です。人間はどうしても自分が生まれた家を中心、根を下ろすことができる故郷が必要です。同時に人間は成長するために、そこから離れて別な人と出会わなければならない。子どもは、家から離れないと大きくなりません。学生は、いつまでも親のもとで生活するのではなく、大人になるために家から離れて自立しなければならない。よい日本人になるためには、外国に行って、しばらくそこで生活することが必要だと思います。このようにパラエティの多い世界で、人間は成長していくということが、私が41年間日本に住んで、わかったことです。それは、神が「バベルの塔」を破壊したとき、人間に罰を与えたということばかりでなく、豊かな生活への良いチャンスも与えてくれたことにも通じていると思います。

2011年6月29日 京田辺水曜チャペル・アワー「奨励」記録